

草原を中心に生息する蝶類

渡辺通人¹

調査の目的

「草原性蝶類」は、富士山北部地域に生息する蝶類群集を特徴付ける種群として古くから注目されてきた。それは、富士山が新しい火山で、高山性・亜高山性の蝶はみられないが、広大な草原が火入れや草刈りなどによって維持されてきた結果、豊富な草原性の蝶類群集が形成されてきたからでもある(清 1971、1983、1988、1996、1996b、高橋 1958、1971、2002、渡辺 1975、1989)。一方、表 1 に示したように、環境省 RDB に掲載されている日本産蝶類の絶滅危惧種・亜種・地域個体群は 78 種(個体群)であるが、その内山梨県内で記録された種は 32 種である。この中で、富士山北部地域で記録された種は 17 種で、2 種は絶滅したと考えられるので、現在生息する種は 15 種ということになる。この内草原性の蝶類と考えられる種は 13 種であり、疎林と草原を主な生息環境とするキマダラモドキ *Kirinia epaminondas* を加えた「草原を中心として生息する蝶」で考えると、オオムラサキ *Sasakia charonda charonda* 以外の 14 種が当てはまるということになる。これは、全国的な傾向でもあるが、いかに草原を中心として生息している種が衰退して絶滅の危機に瀕しているかがわかる。

そこで、高橋(2002)が富士山地域を代表する草原性の種としたチャマダラセセリ *Pyrgus maculatus maculatus*、ギンイチモンジセセリ *Leptalina unicolor*、ホシチャバネセセリ *Aeromachus inachus inachus*、ヘリグロチャバネセセリ *Thymelicus sylvaticus sylvaticus*、コチャバネセセリ *Thoressa varia*、アカセセリ *Hesperia florinda*、ミヤマチャバネセセリ *Pelopidas jansonis*、オオチャバネセセリ *Polytremis pellucida pellucida*、ヒメシロチョウ *Leptidea amurensis*、クロシジミ *Niphanda fusca*、ゴマシジミ *Maculinea teleius kazamoto*、ヒメシジミ *Plebejus argus micrargus*、アサマ

シジミ *Lycaeides subsolanus yaginus*、ミヤマシジミ *Lycaeides argyrognomon praetemsularis*、ヒョウモンチョウ *Brentis daphne rabdia*、ウラギンシジミ *Argyronome laodice japonica*、オオウラギンヒョウモン *Fabriciana narippe*、ギンボシヒョウモン *Speyeria aglaja fortuna*、ジャノメチョウ *Minois dryas bipunctata* の 20 種の内、上述の絶滅危惧種でもあるチャマダラセセリ、ギンイチモンジセセリ、ホシチャバネセセリ、アカセセリ、ヒメシロチョウ、クロシジミ、ゴマシジミ、ヒメシジミ、アサマシジミ、ミヤマシジミ、ヒョウモンチョウを中心にミヤマチャバネセセリ、オオチャバネセセリ、ヘリグロチャバネセセリ、スジグロチャバネセセリ *Thymelicus leoninus leoninus* の草原性 15 種と、更に草原から疎林環境に生息するフタスジチョウ *Neptis rivularis insularum*、ホシミスジ *Neptis pryeri pryeri*、ヤマキチョウ *Gonepteryx rhamni maxima*、ミヤマカラスシジミ *Strymoidia mera*、キマダラモドキとを加えた 20 種を「草原を中心に生息する蝶類」としてその対象とした。そして、分布調査によって分布の現状と変化を知り、生息環境や個体数などの生態調査によって絶滅危惧種の保護のための基礎資料を得ることを目的とした。

調査方法

現地調査

2001 年は 8 月から調査期間になったので、北部地域全体を対象に主要種の分布調査を中心に行ない、林道などを移動しながら適宜徒歩で調査した。ただし、4 月からは予備調査を兼ねて山梨県環境資源調査として全域で分布調査を行っていたので、それらのデータも引用して利用した。分布調査は、本調査の「生物相調査(蝶類)」と同時に行なった。

2002 年は、群集調査地区として II a、II b の 2 地区で 4 月から最低 1 回以上継続してルート・セ

¹ 河口湖町自然共生研究室・NPO 富士自然保護研究所

ンサス調査を行なうと同時に、午後はそれ以外の場所も調査するように心がけた。7月末には、新たに重要地区が見つかったのでⅡc地区として重点種を対象に調査を継続した。今回の調査では、これらⅡa・Ⅱb・Ⅱcの3地区別々に結果を集計してあるが、絶滅危惧Ⅰ類のクロシジミの生息が確認されたため、地域が特定できないように地区別の公表を差し控えることとした。

生態調査は、2002年に分布調査と並行して重点地域で行なった。それは、鳴沢村に属すⅠa・Ⅰb地区（渡辺 1996）と富士吉田市から山中湖村に属す3地区（Ⅱa・Ⅱb・Ⅱcと呼んだ）、河口湖町に属すⅢ地区（山梨動物生態研究会 2002）の6地区であった。

2001年6月から8月にかけてⅠa地区で、2002年6月から8月にはⅠa地区にⅠb地区を加えてヒメシジミを対象に、更にⅡa・Ⅱb・Ⅱc地区でも、2002年6月から8月にアサマシジミ、ヒメシジミ、ゴマシジミ、クロシジミを対象にマーキング法による調査も行なった。また、Ⅱa・Ⅱb・Ⅲ地区では2002年5月から10月まで月1回以上周回ルートを決め、ほぼ一定の速度で歩きながら種名と個体数を確認するルート・センサス法を用いて群集的基礎調査を行ない、分布データなどに利用した。

文献調査および過去の調査データの検索

本調査の「生物相調査（蝶類）」のまとめでも使用した「富士山北部地域蝶類データベース（データ数8409件）」をもとに、これらに未掲載の最近の重要な記録を加えて、1980年以降記録がないメッシュ、1990年以降記録がないメッシュ、1990年以降の記録があるメッシュと今回の調査で新たに記録されたメッシュを区別して図化した。ただし、今回の対象種はほとんどが環境省RDB掲載種または近隣都県での絶滅種・絶滅危惧種にあたるので、他種の調査データからもこれらの種のメッシュ番号が類推できる可能性があるため、絶滅危惧Ⅰ類のチャマダラセセリ・クロシジミを除く分布図は非公開版のみに掲載した。チャマダラセセリ・クロシジミの分布図は非公開版にも掲載を控え直接環境省に報告した。

調査日および内容

現地調査

2001年 8月9日・10日・12日・19日・23日・
27日・29日
9月2日・4日・16日・27日
10月12日・20日
2002年 4月29日
5月6日・14日・22日・30日
6月2日・6日・28日・30日
7月2日・4日・7日・9日・12日・14日・
16日・18日・20日・23日・26日・
28日・29日
8月1日・2日・11日・12日・13日・
14日・15日・17日・25日
9月1日・10日・20日・29日
10月14日・25日

この他、すでに以下の予備調査を実施していた。

2001年 4月20日
5月25日
6月4日・8日・18日・20日・26日・
29日
7月1日・3日・6日・11日・13日・16日・
20日・22日・23日・30日

なお、甲虫類（特にカミキリムシ類）を中心に調査していただいた宮下泰典氏には、2001年9月8日、9月16日、10月13日、2002年5月6日、5月14日、5月27日、7月23日、7月27日、8月3日、9月28日、11月4日、同じく白須英樹氏には、2001年8月3日、9月2日、9月16日、9月17日、2002年5月25日、7月4日の調査時にそれぞれ記録されたデータも提供いただき調査リストに加えた。

結果および考察

個体数調査結果（Ⅱa・Ⅱb・Ⅱc地区）

調査範囲は日によって異なるものの、全体の傾向を見るために各日の合計個体数の一覧表を整理した（表2；詳細は非公開版のみに掲載）。調査期間中に59種、延べ1464個体が記録された。

他の地域に比べて「草原性の蝶」が残っていると同時に、その個体数も多い地域であることを如実に示しているといえる。

表1 山梨県内産蝶類絶滅危惧種生息状況

カテゴリー	種名	備考	草原	疎林	林	富士山北部草原	備考
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+E.N)	チャマダラセセリ	草原性	●			◎	
	クロシジミ	草原性	●	●		◎	
	シルビアジジミ	河川環境	●				
	オウラギンヒョウモン	里山	●			◎ (過去)	県内絶滅?
	ヒョウモンモドキ	里山	●				県内絶滅?
絶滅危惧Ⅱ類 (V.U)	ホシチャハネセセリ	草原性	●	○		◎	
	アカセセリ	草原性	●	○		◎	
	ギフチョウ	里山	○	●	○		
	ミヤマシロチョウ	亜高山	●	●	○		
	ツマグロキチョウ	河川環境	●	○		○ (過去)	
	ヒメシロチョウ	草原性	●			◎	
	ミヤマシジミ	草原性	●			◎	
	アサマシジミ	草原性	●			◎	
	ゴマシジミ	草原性	●	○		◎	
	オオイチョモンシ	亜高山		○	●		
	コヒョウモンモドキ	亜高山	●	○			
	クロヒカゲモドキ	里山		●			
	ウラナミシヤノメ	里山	●	●			県内絶滅?
準絶滅危惧 (N.T)	キマダラモドキ	疎林性	○	●		◎	
	タカネキマダラセセリ	高山	●				
	ギンイチモンジセセリ	草原性	●			◎	
	スズグロチャハネセセリ	草原性	●	○		◎	
	ヒメキフチョウ	疎林性	○	●	○		
	クモツマキチョウ	亜高山	●				
	ヤマキチョウ	疎林性	●	●		◎	
	ヒメシジミ	草原性	●			◎	
	キマダラリツハメ	里山	○	●	○		
	クロツハメシジミ	河川環境	●				
	ヒョウモンチョウ	草原性	●			◎	
	オムラサキ	里山			●	○	
	クモハニヒカゲ	亜高山	●	○			
ヘニヒカゲ	亜高山	●	○				
全国 (78)	32		29	19	6	17 (現存14)	

●：主な生息環境 ○：2次的生息環境 ◎：土着 ○：土着？
 全国：絶滅危惧種・亜種・地域個体群の合計

表2 蝶類個体数調査表

調査日	種類数	個体数
2001年	7月 1日	22
	7月 22日	4
	8月 12日	22
	8月 19日	19
	8月 19日	205
2002年	4月 29日	5
	5月 30日	3
	6月 6日	3
	6月 30日	14
	7月 4日	17
	7月 7日	16
	7月 12日	13
	7月 14日	2
	7月 16日	13
	7月 20日	18
	7月 28日	7
	8月 11日	17
	8月 12日	12
	8月 13日	4
	8月 14日	16
	8月 15日	23
	8月 25日	18
9月 1日	18	
9月 29日	13	
10月 14日	3	
	59	1464

分布の変遷

今回の対象種が、過去の文献データと山梨県環境資源調査および今回の多様性地域調査の結果から、富士山北部地域においてどの様にその分布が変化してきているかをまとめた。しかし、保護の必要上公開版には図示せず地域名だけを示した。

チャマダラセセリ(絶滅危惧Ⅰ類・長野県貴重種)

北部地域の中部から西部にかけての標高 900～1,500mの23メッシュで記録されていることがわかったが、その内16メッシュからは1980以降の記録がなく、1990年以降の記録があるのは6メッシュだけであった。これらの地域でも近年記録がないところが半分あるのが現状である。

本種は、県内でも古くは県北部の奥秩父山系の前衛山地で記録されていたが、現在では富士山北部地域しか生息地がなくなってしまった。伐採後の土壌が露出した裸地を好み、草地から疎林の環

境でも生息するが森林化が進むといなくなってしまうので、人工林との結びつきも強い。定期的な林地更新という人為作用によって絶滅の危機から辛うじて残っている状態で、本種の保護も視野に入れた林地管理をして行かないと絶滅してしまう危険性が非常に高い。

クロシジミ (絶滅危惧Ⅰ類・神奈川県絶滅種・埼玉県絶滅危惧Ⅰ類)

本種はほぼ標高 1,000m 以下の里山環境の限られた場所にほそぼそと生息していた (7 メッシュのみ) が、里山環境の急減にともない 6 メッシュではすでに 1980 年以降記録がない。唯一残された地区でも近年個体数が非常に少なく絶滅かと心配されている。そんな中で幸いにして、今回の調査で本種が別の地区から発見された。ここは 30 年以上前から何人もが調査に入っていたが未発見であった。生息地は、半径約 50m の 2 ヶ所だけであった。また、本種の幼虫は 1~2 令までアブラムシ類の分泌物を吸汁し、その後はクロオオアリから口移しで餌をもらう (猪又 1990) という特異な生活史をもつ種であり、マーキング調査からも雌はほとんど生息地を離れないと考えられた (渡辺 未発表) ことから、生息地の保護が急務である。

アサマシジミ (絶滅危惧Ⅱ類・埼玉県絶滅種・神奈川県絶滅種)

山麓の東部から北部、本栖高原の一部に記録があったが、周辺部から記録されなくなり、とうとう西部の草原でも記録されなくなってしまった。現在残る生息地は主な 3 地域のみとなっている。幼虫の食草ナンテンハギは、山麓一帯に広く分布するが食草はあってもいなくなってしまった地点が多い。中令以降の幼虫のほとんどはアリ類と共生しているが、今年度確認された本種幼虫と一緒にいたアリは、1 例がクロオオアリであった他は 3 例ともトビイロケアリであった (萩原康夫氏同定)。しかし、食草もあり共生するアリ類がいてもいなくなってしまった産地が多いことがわかり、改めて衰退の原因究明が急務であるといえる。そうした中で今回初めて発見された産地 (里山環境が一部残っている) は貴重である。

ミヤマシジミ (絶滅危惧Ⅱ類・東京西部野生絶滅・埼玉県絶滅危惧Ⅰ類・神奈川県絶滅危惧種)

本種は河川環境に大きく依存している種 (清 1983) で、山梨県内においても火山性地域の生息地は急激に減少しつつある。本地域においても衰退傾向は顕著で、1990 年以降に記録のある地点でも、今回の調査では東部の一部地域以外では確認できなかった。それも狭い範囲に限られ、今回初めて記録された地点も 1 頭のみの記録であるので移動個体の可能性もある。ただ、2002 年は生息地で一時的に多数の個体が見られ、食草のコマツナギは、生息地周辺にも散在するので、個体の分散によって新しく生息地が形成される可能性も残されている。危機的状況にあることを念頭に今後の継続調査が肝要である。

ヒメシジミ (準絶滅危惧・東京西部野生絶滅・埼玉県絶滅危惧Ⅰ類・神奈川県絶滅種)

産地は広くあったが、1990 年以降記録のある地点は全体の半数以下になってしまった。幸い今回の調査で新たに 3 メッシュから記録されたが、主生息地は過去の大草原の周辺に集中しており、周辺産地からいなくなっている傾向がみられる。1997 年から行なったマーキング法を用いた移動調査では、主生息地の個体はほとんど移動せず、発生後期に一部が分散することがわかっており (渡辺 2002)、その主生息地に壊滅的な打撃が加わると、meta-population 全体が絶滅してしまう可能性が高いと考えられる。

また、本種は富士山においては 1979、1980 年に 2,000m を越える地点からも記録されたが、今年の調査では環境は大きく変化していなかったのに、全く確認できなかった。長野から石川県にかけての高標高地ではアサマシジミの亜種が生息する (猪又 1990) が、地史的に新しい富士山では高標高地にヒメシジミが分布するという意味でも貴重な個体群であり継続調査が望まれる。

ゴマシジミ (絶滅危惧Ⅱ類・神奈川県絶滅種)

衰退の激しい種で、過去には山麓の里山環境に広く分布し、畑の縁にあった狭い草地でも見られた。しかし、現在では、主な 3 地域でしか記録されていない。そうした意味では、1998 年に西南部で 1♂が採集された記録 (宮下 2000) は、飛び離れた産地で大変重要な記録である。

過去の記録のある地域でも森林化が進んでいる所では絶滅する可能性が高い。

ヒメシロチョウ（絶滅危惧Ⅱ類・東京西部野生絶滅・神奈川県絶滅危惧種）

主要生息地が3地域あり、そこを中心にその周辺でも見られているが、やはりこれら主要生息地から遠い所からいなくなっている傾向が窺える。幸いにして東部の一部地区では個体数もかなり見られた。しかし、それ以外の地域では食草ツルフジバカマがあってもいなくなっている所も多いので、保護の検討が必要である。

ヒョウモンチョウ（準絶滅危惧・埼玉県絶滅種）

ゴマシジミと同じワレモコウを食草とするので、ゴマシジミの生息地と重なる所が多く、主に3地域とその周辺に見られる。しかし、ゴマシジミの幼虫がシワクシケアリ幼虫を餌とするのに対して、本種はワレモコウのみを餌とするのでより広く分布している。しかし、ワレモコウが生育する草が少なくなっているため分布は狭められている。そうした意味でも里山環境でもある生息地は貴重である。

アカセセリ（絶滅危惧Ⅱ類・東京西部野生絶滅・埼玉県絶滅種）

すでに2地域にしか残っていない。耕地化や森林化が進んだ産地には1980年以降記録がなくなっており、いなくなった可能性が高い。筆者は1972年に大沢の2,900mで死体を拾得したことがあるが、これは吹き上げによる偶産個体と考えられる。本種も非常に危機的状況にあるといえるので、保護策の検討が急務である。

ホシチャバネセセリ（絶滅危惧Ⅱ類・東京西部野生絶滅・埼玉県絶滅種・神奈川県絶滅種）

本種も3地域とその付近に記録が残っているのみで、周辺ではいなくなっている。残されている産地でも個体数が減少しており、生息地数の減少とともに危機的状況にあるといえる。食草はオオアブラススキであるので食草の面からだけでは衰退の原因はわからない。

ギンイチモンジセセリ（準絶滅危惧・埼玉県準絶滅危惧）

主要生息地である4地域を中心に分布するが、

周辺にも産地が散在する。しかし、周辺地域からいなくなっている傾向があり、森林化が進んでいる所から記録がなくなっている。ただ、孤立に近い産地でも生息が確認された地点も散在しているので、保護策を検討すれば分布を広げる可能性もあると考えられる。

オオチャバネセセリ（山梨県RDB一次候補種）

過去には普通に見られた本種が激減していると指摘されている（高橋1989、2000、2002）が、今回文献調査してみてもあまりにも記録が少なく驚いた。まだ文献渉猟は十分ではないが、今回の「富士山北部地域蝶類データベース（データ数8409件）」には、11件のデータしか見られなかった。なおかつ、その内の4件は梶田（1929）によるデータであったのでメッシュが特定できなかった。筆者の小中学校時代（1970年前後）には富士山北部地域でも西部のササ類群落では、普通種と言える位多く見られた記憶があるが、あまりにも普通すぎて記録してなかった。それが、分布図にしてみると過去の記録は5メッシュしかなく、1990年以降も記録があるのは2メッシュ3件だけであった。本種の激減の原因については、激減した時期が1960年代と古いので、気候の温暖化だけでは説明がつかないと考えられる。富士山北部地域の絶滅危惧種といえ、その分布調査と保護策の検討が必要である。

スジグロチャバネセセリ（準絶滅危惧・神奈川県絶滅種）

「生物相調査（蝶類）」で述べたように、本種は北部地域には分布しないと考えられていたが、今回のまとめで分布が確認された。西部と北東部山麓の一部でしか記録されていない。それも、1990年以降も記録のあるのは2地域だけである。最近では富士山の周辺地域でも記録がほとんどないので、富士山北部地域ではなおさら危機的状況である。

ヘリグロチャバネセセリ（神奈川県絶滅危惧種）

前種に最も近縁の種で、形態的にも酷似している。これら2種は、捕獲によるか、静止中の個体でそれぞれの特徴がはっきり区別できる状態でないとも種名の特定は困難である。県内においても本種の方が前種より分布が広く（清1978）、北部地域においても本種の方が広く分布している。

ただ、標高の低い方に前種が、より高い地域に本種が棲み分けに近い状態で分布しており、両種の混生する場所は非常に少ない。本種も3地域とその周辺に記録が集中しており、1990年以降も記録があるのは、約3分の1の産地だけになってしまった。

フタスジチョウ（東京西部野生絶滅）

「生物相調査（蝶類）」で山地帯（標高1,000～1,600m）を分布の中心とする種群で扱ったが、草原から林縁・疎林までの環境（オープンランド）との結びつきが強いので、ここでも扱うこととする。本種の場合、幼虫が林道の脇の林縁に生育するシモツケ類を好む傾向があるので、かなり広い範囲で記録されているが、半分以上の産地では1990年以降の記録がなくなってしまった。林道の舗装化の影響が大きいとも考えられる。過去の個体数が多く、分布地域の核となっている産地が今後の本種の存続の鍵を握っていると考えられる。

ホシミスジ（神奈川県絶滅危惧種）

幼虫が前種と同じシモツケ類を主な食樹としているので、前種の分布範囲は本種の分布範囲にほぼ含まれる。本種幼虫は園芸種にもつくが、前種の幼虫は園芸種を好まないため、本種の方は山麓の住宅地付近まで分布している。それでも1990年以降は、広くみられた産地の3分の1以下しか記録されていないので、フタスジチョウに準じて分布の衰退が加速される可能性が高い。

ヤマキチョウ（準絶滅危惧・埼玉県絶滅種・神奈川県絶滅危惧種）

本種も山地帯（標高1,000～1,600m）を分布の中心とする種群で扱ったが、草原から疎林の環境を好むので純粋な草原性の蝶ではないが、草原を中心として生息している種といえる。主要な3地域とその周辺に多い。幼虫が同じクロツバラを食樹としている次種より分布が広く、今回の調査で新たに7メッシュから記録できたのも、本種の移動性が高いこと（渡辺 1989b）に起因していると考えられる。

ミヤマカラスジギミ（神奈川県絶滅危惧種）

北部地域においては、幼虫が前種と同じクロツバラを主な食樹としていると考えられることか

ら、本種のほとんどの産地は前種の分布範囲に含まれる。しかし、本種の方が食樹の群落からあまり遠くへ離れない傾向があるので、クロツバラ群落の生育地付近に記録が集中している。幸いにして今回の調査で3メッシュから新たに記録されたが、1990年以降も記録のある地点は非常に少なくなっているため、環境省のレッドデータ種にはなっていないが、北部地域においては準絶滅危惧種としてクロツバラ群落とその周辺の環境を保護しても良いと考えられる。

キマダラモドキ（準絶滅危惧・埼玉県絶滅種・神奈川県絶滅危惧種）

前述したように、本種は草原だけにみられる種ではなく、草原にもみられるが主に疎林の環境を好む種である。現在では、1990年以降の記録のある地点は、主な2地域に限られてしまっている。

筆者は、鳴沢村の雑木林で1967年に1♂を採集したが、その後全く見られていない。この記録は、過去には山麓一帯に里山環境としての雑木林と耕作地帯が広く見られたので、その当時はもっと広い範囲に分布していた可能性を示唆すると同時に、本種を含めた里山環境に生息する種の減少は、開発に伴う雑木林と草地・耕作地の減少にともなって起こった可能性をも示すものとして重要と考えられる。

ミヤマチャバネセセリ

本種の最も古い記録は1971年に本栖高原で幼虫が発見されたものであり、それ以前から北部地域に生息していたかどうかははっきりしない。しかし、その後記録地点が増えており、今回の調査でも2ヶ所で新しく発見された。本種は、ここまで挙げてきた種とは違って、北部地域で草原地帯を中心に分布を拡大しているといえよう。気候の温暖化の影響、あるいは周辺山地を主な生息地としていた本種が元から持っていた分散力によって自然に拡大してきたものとも考えられるが、はっきりしない。いずれにしても今後の動向が注目される。

以上、草原を中心に生息する20種の分布の変遷について述べたが、オオチャバネセセリ、ミヤマチャバネセセリを除く18種は、環境省または隣接県の絶滅種あるいは絶滅危惧種に指定されている種である。これらの種が、まだ生息できて

いることが確認できたことは幸いであったが、富士山麓地域においても開発などの影響で、これら草原を中心に生息する種がますます絶滅の危機にさらされると考えられる。その保護策を検討しつつ、これら絶滅危惧種のみならず古くからの富士山の自然を構成している動植物やその基盤となる地形地質を全て包含した、本当の意味での富士山地域生態系の保護・保全策が早急に検討されることを期待したい。今回の報告がその基礎資料として役に立つことを願っている。

文献

- 猪又敏男(1990)原色蝶類検索図鑑. 北隆館
- 梶田長(1929)富士山及びその北部地方における昆虫. 特に蝶類について. 動物学雑誌 41(484): 77-99.
- 宮下泰典(2000)富士山麓の昆虫. 山梨の昆虫(44): 1158-1161.
- 清邦彦(1971)富士山周辺における草原性蝶類の分布とその歴史的成立. 昆虫と自然 6(9): 7-11.
- 清邦彦(1983)静岡県および山梨県における河川敷・堤防・海岸の蝶覚え書(1). 駿河の昆虫(120): 3503-3530.
- 清邦彦(1988)「富士山にすめなかつた蝶たち」. 築地書館、180pp.
- 清邦彦(1996)富士山麓の草原における蝶類群集の変化[第1報]. 駿河の昆虫(173): 4863-4880.
- 清邦彦(1996b)富士山麓草原における蝶類群集の変化[第2報]. 駿河の昆虫(176): 4941-4950.
- 高橋真弓(1958)富士山麓における蝶類分布とその生物地理学的意義について. 生態昆虫 7(1): 5-13.
- 高橋真弓(1971)富士山の蝶類. 「富士山」富士山総合学術調査報告書. 富士急行: 966-983.
- 高橋真弓(1989)静岡県および山梨県南部におけるセセリチョウ科3種(ホソバセセリ、オオチャバネセセリ、ミヤマチャバネセセリ)の分布と採集記録. 駿河の昆虫(148): 4229-4252.
- 高橋真弓(2000)1995-1999年富士山麓における蝶類採集・目撃記録. 駿河の昆虫(190): 5321-5332.
- 高橋真弓(2002)富士山麓の蝶類. 「富士山の自然と社会」. 国土交通省中部地方整備局富士砂防工事事務所: 129-139.
- 渡辺通人(1975)富士山北部における蝶類の群集構造に関する研究. 1. 1973年度の個体数調査結果. 駿河の昆虫(90): 2623-2641.
- 渡辺通人(1989)富士山の蝶類. 富士箱根国立公園管理官事務所資料. 環境庁.
- 渡辺通人(1989b)ヤマキチョウ属についての疑問. 日本の生物 3(3): 61-68.
- 渡邊通人(1996)昆虫群集について考える—富士山昆虫群集の構造を考えるための試論—. CETTIA(山梨動物生態研究会会誌)(8): 1-8.
- 渡辺通人(2002)富士山北部におけるヒメシジミ個体群の個体群構造と環境構造との関係. 野生生物保護学会第8回大会講演要旨: 33.
- 山梨動物生態研究会(2002)富士山麓の動物調査. FAUNA(山梨動物生態研究会会誌)2002年6月号: 1-22.

